第７回 aaca サロン開催報告
商業施設の企画とそのインターフェースデザインによって生まれるまちの景観

株式会社ドラミートウキョウ
代表取締役社長
真榮城徳尚

第７回の aaca サロンは、「商業施設の企画とそのインターフェースデザインによって生まれるまちの景観」と題して、株式会社ドラミートウキョウ代表取締役で、建築の企画から運営まで幅広くプロデュースされている真榮城徳尚（まえしろのりたか）さんにお話を伺いました。

また、会場に関してはドラミートウキョウが企画し、運営をしている渋谷のコワーキングスペース「SLOTH JINNAN」のギャラリースペースをお借りして開催しました。いまだに収まりを見せないまま徐々に「with コロナ」の生活となりつつある昨今の感染配慮として、これまで同様リモートでのライブ配信をベースとしていますが、現地に参加いただける方には少人数に限り参加いただきました。

真榮城さんは事業企画から建築企画、商品企画・運営まで一貫してプロジェクトに関わっています。その作品について、印象的だったものを抜粋してご紹介します。

ひとつめは山形県米沢市にある養鶏農家と一緒につくったスイーツ店舗とカフェ「ufu uhu ガーデン」です。米沢という地方において、地元の人が少しオシャレをして出かけたくなるようなハレの場や、東京に負けない目を引くコンテンツ、米沢ならではの広がりのあるランドスケープをしつらえることで米沢圏内での非日常的な空間を創出しています。このプロジェクトでは単に建築をつくるだけでなく、地元若者の雇用や、訪れるお客さんの購買体験について、地方に根差した事業の在り方を商品開発の視点から深く考えられており、それがインターフェースとしてあらわれている点が大変印象的でした。昨今では地方創生が注目されていますが、建築的視点をもって事業をプロデュースすることの可能性を感じる作品でした。

ふたつめは今回会場としても使用したコワーキングスペース「SLOTH　JINNAN」です。以前アパレルの店舗として使用していた２階店舗ですが、アクセスとなる１階エントランス部分をギャラリーとして開放しています。テナントビルのほんの一部の狭小な空間ではありますが、感度の高い若者が気軽に表現や情報発信のできる拠点として、渋谷のまちの風景をかたちづくっています。

作品紹介後、コロナ禍における街並みについて話題になりました。真榮城さんのオフィスがある渋谷神南エリアでは、グランドレベルの路面店やテナントがどんどん退去している一方、北谷公園をはじめとしたパブリックスペースや短期貸しの小さなギャラリースペースで行われるイベントには多くの人が集まっており、にぎわいを見せています。コロナ禍によってイーコマースやネットショッピングが普及し、店舗の在り方は加速度的に変化しているなか、今後のグランドレベルのスペースの活用の仕方にとって示唆的でした。

街並みのインターフェースは、建築をつくるだけでなくそこで行われるコンテンツづくりも重要であること、それを理解しながら空間をつくることのできる職能がますます求められてくるように感じました。

今回は商業施設のインターフェースという切り口での講演でしたが、当協会を立ち上げられた芦原義信先生は著書「街並みの美学」（岩波書店 /1979）において、街並みはそこに住みついた人々が歴史の中でつくりあげ、風土と人間のかかわりのなかで成立したことを述べています。複雑化した現代の都市において良い街並みとは、考え抜かれた事業と空間デザインの両軸によってこそ生まれるものなのかもしれません。

（文責：遠藤 貴弘）

Ufu uhu garden（山形県米沢市）

SLOTH　JINNAN（東京都渋谷区）